

クエゼリン大里清さんを囲んで



マーシャル方面遺族会
 (旧クエゼリン方面戦歿者遺族会)
 郵便番号 154
 世田谷区野沢 3-11-3
 電話 東京 (424) 4300
 振替口座東京 0-93487 番
 編集兼発行人 浮田信家

二月六日の印象

島根県会員 園山 和子

先日靖国神社での慰霊祭に参加いたしました折には、一方ならぬ御世話に預りまして誠に有難く厚く御礼申し上げます。

会長様はじめ役員、会員の皆様には、はじめからお目もじ致し本当に嬉しうございました。皆様のご尽力により御鄭重に毎年慰霊祭を挙行して頂き遺族の一員として有難く御礼申し上げます。

前夜祭の映画で、はるばる現地墓参いただきました御様子、そしておつくり下さった立派な墓碑、それを鄭重にお祀り下さっております様子を拝見致しましてございます。

又六日の慰霊祭には親しく昇殿参拝いたし、感謝感激で胸が一ぱいございました。お蔭様でかねての念願が叶えられ安心致しましてございます。

つづいての直会旅行には和やかな一日をご一緒し、嬉しい楽しい楽しい一日を過ぎて頂きました。何から何まで至れり尽せりの行事に参加いたし、一生忘れられない欣びと思ひ出になりました。

七日更に一日九段会館に泊めていただき八日はゆっくり靖国神社の宝物遺品館に参り陳列の副碑にお参りいたしました。本会副碑説明の立札に「本副碑は、昭和四十三年秋マーシャル方面遺族会が、クエゼリン島に建立した碑の二分の一のもので、同島には渡航巡拝困難なるため副碑を複製し、同方面戦歿者の慰霊顕彰のために奉納されたのである。都道府県の石は、当該地特産の名石である」と認めてあり、前夜祭の8ミリに見た現地慰霊碑を眼のあたりを感じ、感無量でございました。

重ねて厚く御礼申し上げます。来年も御参り致したく存じます。当日一寸お願い致しましたように、今後現地参拝の機会がございましたら、是非お供させていただきますたくお願い致します。

目次

二月六日の印象

……会員 園山 和子(1)

升田仁助海軍少将の追想

―その一……古木 秀策(2)

墓参に寄せて

……幹事 大高 吉郎(4)

クエゼリン大里清氏夫妻書簡……(5)

墓参感謝……幹事 国松ふみ江(6)

チェンバレン夫人書簡……(6)

本年二月六日の行事報告

……事務局(7)

直会旅行に参加して

……常任幹事 井上賀雄(7)

昭和50年度決算報告……(8)

昭和51年度予算……(8)

入会の喜び……会員 大上八重子(9)

寄附者芳名……事務局(9)

会費値上げにつき

……会長 浮田 信家(12)

事務局だより……事務局(12)

升田仁助海軍少将の追想 — その1 —

古 木 秀 策 記

昭和十九年一月十八日私は南洋第一支隊第二大隊の一部を直接指揮してマシナル諸島ヤルト環礁のイメージ島に上陸、第62警備隊司令升田仁助海軍少将の指揮下に入った。イメージ島の小さいのにも驚いたが、島全体に満ちている何とも言えない和やかな温かい雰囲気が一層私を戸惑はせた。だが私はその温かさはどこから生じたのかを知ることが出来た。それは升田少将が部下将兵と軍属に注ぐ指揮官としての愛情だけではなく、人間として人間に対する愛情と、部下の人達が少将を自分達の指揮官であると同時に、誠実と情愛に満ちた人間として敬愛する心情との交流が醸し出していたものだった。

私は昭和十二年満州に居た時、服部という中隊長の下で、之に近い経験をもった事があるが、指揮官の人格或は徳ともいべきものが部下軍隊にどんな風に影響するものかという事を、このときしみじみと感じたのである。

当時私は升田少将を「司令」と海軍式に敬称を省いて呼んでいた。私は陸軍少佐だったが同時に海軍少佐であるとして一人で勝手にきめていた。此の追悼文を書くに当たっても、そう呼ぶ方が、

目のあたり少将と語るように思はれるので、そう呼ぶことにする。司令は話し好きだった。初対面の私にも百年の知己の如く自分をまる出しにして話し込まれた。まだ健康だった頃は朝晩散歩を兼ねて陣地を視察して誰彼となく話しかけられた。話し相手には士官とか、兵とか、軍属とか、海軍とか、陸軍とか、邦人とか、島民とかいう区別は全然頓着されなかった。黄昏れてゆく海を背景にして基地棧橋あたりで兵隊や島民と、田圃帰りの農夫の様に、

或は又井戸端会議のおかみさんのように気易く立話をして居られた姿が、今も私の目の前にちらつく。司令は決して人気取の為にそうされたのではなかった。上に対しても、下に対してもウマイ事の言える人ではなかった。点数取りとか、見栄とかという事とは全然縁のない人であった。そうしたいからそうしたので、それは升田仁助という一人の人間の内奥からの天眞の要求のままの動作であったのである。将兵も、軍属も、島民も自分が司令と話し乍ら、

或は又仲間の者が、司令と話すのを傍で聞いてい乍ら幸福そうに見えた。誰も彼も、司令は自分の指揮官であるという信頼と安心と、そして又自分の血

のつながった親父であるといった親しみを感じていた。司令は常に率直だった。怒る時は口から泡をとばして怒られた。だが怒鳴られるのは士官に限られていた。兵や軍属が怒られるのを見たことはなかった。どんな時でも相手に軽蔑とか皮肉とかいう気持をもって対されるようなことはなかった。

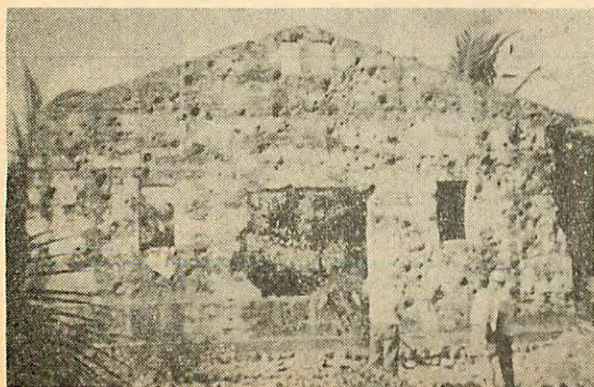
敵の砲撃と謀略と飢餓が一日の休みもなく続き、絶望の果てに死がヤルト部隊を待っていた戦況下で、マシナルの他基地の島民が敵に奔ったという情報を得ても、司令は自分が親愛するヤルトの島民達に限ってそんな事は起り得ないと信じて居られた。余りに自分の心が清純の故に、最後のドタン場では人間の心にひそむ利己本能がどんな形をとるかという事を疑うことの出来ない人であった。

ヤルト島における司令の指揮振りを語る為には、先づ当時の悲惨な戦況を述べねばならない。

ヤルト環礁は中径約50乃至60杆の礁湖を抱いた珊瑚礁で、幅五百米以下の小島が七十余珠数の様に断絶していた。水上機航空基地と警備隊本部のあるイメージ島は、長さ約千四百米、幅約五百三十米しかなかった。昭和19年の後半期に入ってから対空火砲、兵器も概ね破壊され、弾薬も殆んど尽きた。終戦時は使用に堪えた対空火器も既に摩滅し切つて、修理を重ねた25耗機銃一門に過ぎず、その弾薬の使用も

敵機編隊の一回の空襲に対し、50発以下に制限されていた。島の一番高い標のところが、最低潮面から二米しかないイメージ島は、大潮の時には弾庫に潮が満ちて、島の三分の一は海になり、島の中央部は弾庫も三〇〇米に亘つて内外海を連ねて川のように潮が流れた。

司令と私達の小屋の床の上も潮が30厘程上つて小魚が泳いでいた。島を覆っていた椰子の葉は全くちぎり取られ、短く切断された椰子の幹が卒塔婆のように立っていた。終戦直後やって来た米海軍の某中佐が私に語ったところによれば、ヤルト島は第二次大戦



今に残るヤルト島兵舎の弾痕

を通じて面積に対する投下弾量の比率は、地中海のマルタ島に次いで世界で二番目だったという。

クエゼリン島陥落以後は一回も後方からの補給がなかったので、兵器弾薬は勿論困ったが、それ以上に困ったのは食糧であった。クエゼリン陥落後間もなく飢餓がマーンシャルの各基地を襲った。終戦時マーンシャルの他の三基地の戦病死者数は総員の半数以上に上り、その大部分は栄養失調症だった。上空と四周の海からの絶えざる敵の監視と攻撃だけではなく、宣伝ビラ、スパイの潜入、日本人捕虜による投降勧告の放送等の謀略を受け乍ら、限られた現地物資で内輪同志の闘争もせず、生命をつなぐことがどんなに困難であるかは、体験者だけが知ることであろう。ヤルトは他基地と略同様な悪条件の下で栄養失調死を極めて少数に食止めることが出来、戦病死者数の総員(約二千二百名)に対する比率は約2割に過ぎない。その原因として数え得るものの中で、司令の基地死守の任務完遂に対するきびしい責任観念と、部下及び島民に対する深い愛情を基調とした指揮とを第一に挙げねばならない。「一人でも餓死者を食止めねばならぬ」と口癖のように言い乍ら隊員一人一人の生命を生かす為に必要な問題を事の大小を問はず、自ら研究し、自ら決裁された。司令の小さい手帳には一切のデータが細かい数字で

ぎっしり書き込まれていた。

昭和20年に入ってから、発熱と下痢で次第に衰弱して病床に就き乍らも、一日として大小の指揮を廃する事なく、文字通り血を注ぎ、肉を削られたのである。こんな生活が二年近く続いた。

私は司令宛の一切の軍機電報の閲覽を許されていた。聯合艦隊と第四艦隊の作戦指揮や処置に関しては、私は出来るだけ慎んでいたが、時には司令の前で不平を洩らさずにはいられなかった。だが司令が上司に対する不平と境遇についての愚痴を一言も口にされるのを聞いた覚えはない。やせ我慢のようには見えなかった。若しそうなら、何かのはずみにそれが現れたであろうが司令にはそんな鬨すら認められなかった。熟慮すべきは熟慮し、決すべきは決して処置は的確に命じ、どうにもならない事に対して悶々とされる様子は全く見受けられなかった。かような心構えと態度はどこから来たのかを推量するのは私にとって僭越ではあるが、武人としての多年に亘る真剣な修練と、厚い信仰心からではなかったかと思われる。

司令は毎朝「総員起し」で起き、服装を整えてイメージ神社に参拝し、毎月の一日と十五日には特に丁重な拜礼と祈願をし、二、三カ月毎に各隊各部隊の各階級代表者を集めて祭礼を営まれた。司令には娯楽はなかった。強いて

言えば食事後の私達との短時間の談、夕方肩を叩いて貰ひ乍ら交す従兵との雑談、それから写経だった。ほんの僅かの暇があれば浄土宗聖典を繙くか、般若心経を写して居られた。若い時からの念仏修行の話はよく聞かされた。或る時こういう話もあった。

「潜水艦が沈没する想定で、死を待つという必境に自分を置いて心を鍛えた事があったが、それは苦しいものですよ」又或時は宗教の話をして信仰に生きる喜びを述べた上でこう言われた。「私は日本人としてその上に尚有難いものを頂いている」この「有難いもの」とは皇室であり、国体である事については言うまでもない。かような話はすべてベランダと呼ばれていた小さな食堂で、食事を共にしていた数名の幹部と食後の歓談の際に述べられた事である。司令の生立ちや結婚申込みの話もよく聞いた。食後の此の歓談が、絶望以外に何も持たなかった私達の心をどれ程和やかにし、又お互いの信頼を深めるのに役立つかは計り知れない。額の上に小さな瘤のある黒い顔に無邪気な微笑をたたえた眼を見はって早口にしゃべる司令の声を今も耳に聞くような気がする。

司令は終戦後の十月五日に見事な自決を遂げられた。クエゼリン陥落に引き続き敵の完全な制空制海権下にヤルトが孤立して一日数回の敵機編隊の銃爆撃を受け、敵の上陸作戦を予期しな

ければならなかった19年3月初旬に於ける三名の米軍飛行士処刑の責を一身に負はれたのである。

これより先、終戦直後に司令は君国に対する敗戦の責任を痛感し、「生きて敵の軍門に降るを潔しとせず」として自決を決心された。此の時には捕虜処刑問題で「戦犯」として訴追されるなどとは司令始めヤルトの誰一人考えてはいなかったのである。私は警備隊の副長等と共に決心を翻して頂く為に百方力を尽した。司令の様に誠実な責任を解する人こそ敗戦後に危ぶまれていた国体の護持と国家再建の為に、なければならぬ人だと固く信じていたからである。「敵の軍門に降る恥を忍んで国家再建に尽せ」ということが陛下の命令であり、国体護持があやふやな状況にある今日、死すべき命を永らえて王事に勤勞し、それを完うして、後に死ぬのが臣子の分ではないかという趣旨を私は膝詰で具申した。ようやく決心を翻された時に飛行士問題を追求されて来た。「生きて敵に降る」を潔しとせぬ司令には「犯罪人」として敵の縄目を受けることは堪え得る所ではなかったし、又自ら処刑の命令者として死を以て責任をとれば部下に累を及ぼさないと司令が考えられたのは、その純粹な軍人精神にとっては当然であった。

墓 参 に 寄 せ て

大 高 吉 郎

おもえば、慌^{おた}だしい出発だった。墓参許可のご通知を受けて以来、私は参加すべきか、否か迷っていた。同行を予定して申し込んでいた母と妹が、母の健康を理由に不参加の連絡があり、加えて私には旅行予定期間中、会社での用件が重っていた。

以前から当遺族会には三つの悲願があると聞かされていた。即ち、

- 一、例年の祭祀、供養を欠かさない事
- 二、慰霊碑の現地建立
- 三、現地墓参の実現

これである。

前二者については一は実施しつつあり、二については既に目的を遂げている。残る一つが私共遺族会員の切実な願望であった。

事実、今回の墓参許可は極めて異例の事であった。これには在島要職の方々の御理解、日系職員の皆様のご尽力、それに当会発足以来の会長、副会長、各役員の熱心な活動によるもので、毎号の機関紙「環礁」で見られるとおり、今回の墓参は文字通り、悲願、天に通じたと言っても過言ではなかった。この機会に参加出来ない、現地の状況が過去、三十年間上陸を許されなかった場所であるだけに、将来

の可能性は甚だ稀薄と判断せざるを得なかった。

私は懐かしい長兄の眠るクエゼリンに行きたかった。思案の結果、私は参加させて貰うようお願いしようとした。そう決心し、机から顔を挙げる、うす暗くなった向い側の壁に、あの戦死した兄の面影がスーッと浮んで、やがて消えていった。故兄もきつと喜んで迎えてくれるだろう。

クエゼリン島の滑走路に降りた。私共は、遙か、ここまでたどりついた安堵感と現地をこの脚でふんでいるという複雑な感慨にとらわれていた。

空はあくまでも蒼く、南海のてりつけるような太陽はキラキラと肌を焼いたが、海上を渡ってくる潮風は顔にこちよく吹いていた。この地中から湧いてくるような熱気の中で、多くの同胞が血を流して闘った悲惨な玉砕があったとは、信じられない、明るい、緑の平らな島であった。

今迄、想像していた南海の孤島とは大分、イメージが違っていた。数珠状の島々が広大な円をつくって珊瑚礁は遙か水平線のかなたまで続いていた。クエゼリン本島は綺麗に整地され、芝がうえられていたが、椰子の樹は意外

に少なかった。ここで兄が死んだのであろうか。「やっと、来ましたよ、兄さん」言はうとしたが、言葉にならなかった。とたんにこみ上げてくるもの形容しがたい感動！ 久しぶりに出る涙だった。

想えば、数々の兄の優しい思い出が走馬灯のようにかけまわってゆく。

当時、兄は私の卒業を楽しみにしていたが、それをみないで南方に行ってしまった。私が学徒出陣で、満州から出した便りを兄はこの島で読んでいたのだろうか！ また、私の隊の教育掛将校と班長が偶々兄の友人であったこと等、奇縁を葉書に綴って送ったが、これも届いていたのだろうか！

それに兄の玉砕のあった十九年の二月の二十五日、父が静岡でなくなっていた。この訃報を中隊長室で聞いた私は、その足で駐屯地の裏山に登って行った。丁度、夕刻であった。あのあかい夕陽が、まさに落ちようとしていた。五色に輝く雲を背に、遙か東方を拝して、父の冥福を長い時間をかけて祈ったが、その時にも今のような涙が滂沱として流れてやまなかった。既に兄がこの地で二〇日前に戦死しているとは夢にも知らなかったが、この月、二人の肉身を私は喪っていた。

ハッと気がついて現実にもどると、迎えるバスの傍らに現地在任の中田さんの笑顔が立っていた。陽やけた柔らかな顔、白の半ズボン姿だった。久調

を叙し、今回の謝辞を申し上げると、唯うなづいて笑っていたが、眼には涙が光っていた。

直ちに特別用意して下さったバスで慰霊碑へ……

清潔なゴミ一つない、手入された霊苑、昨日据え置かれたように真新しく感ぜられる慰霊碑、那智黒の玉石もあざやかであった。

もう何年になるのだろうか、迎賓館で見送った慰霊碑ののままの姿が強い陽差しを受けて輝いていた。

それに現地の皆様の厚意が香る、絶えることのない、お線香と生花が供えられていた。苑内には一本のタコの大木が、そこだけを陽影を宿してサラサラと葉を鳴らしていた。

墓参のために許された時間は刻々と過ぎ去ってゆく。感傷にとらわれている時間は少なかった。献花、お線香を供えて、長い合掌……30分の時間がアツと言う間に、短く感ぜられる。

私には更に余分な任務があった。この墓参の状況を後に記念に遺すために出来るだけカメラに納める必要があった。(あらかじめ、会長からの熱心な要請がききとどけられて、今回に限り撮影が許されていた) 高林、高橋両君も懸命に8ミリを廻していた。私は無我夢中にシャッターを切った、うまく写ってくれば良いがと、心に念じながら……みかねてか、徳原さんと井上氏が私のカメラのシャッターを押し



日本人墓地と筆者

てくれた。

額いた手に墓苑の土が着いていた。この土の下で多くの英霊がねむっているのだ。遺骨はこの土と化しているかも知れない。

手についた土が汗で濡れて、それがまた、熱い陽差しでまたたくまに白く乾いてゆく。誰の顔も涙と汗でクシャクシャだった。

母を同行させてやりたかった。そう思いながら手についた砂と土をハンカチに丁寧にぬぐい取って大事に胸に納めた。老いた母はおそらく、このハンカチについた砂を、遺骨のない兄のお墓に持って行って葬ることだろう。

せきたてられる現実の声にあわててバスに走り寄った。バスの前まで送ってくれた大里ご夫妻、それに徳原、中田さんと別れの握手をした。皆さんの温かい手が、感触が、心にしみこんでくるようだった。このような誠意の方々に護られ、維持されている慰霊碑は他にあるだろうか。頭の下がる思いだった。次はいつ、お参りにやって来

れるだろうか！

「英霊よ、安らかに眠り給え」

兄さんよ、また会いましょう！」

心でそう言いながらバスのステップを踏んでいた。立ち去り難く……。振り返ってみる慰霊碑は涙でかすんでい

た。
（幸いにして私共は多年の願いであつた墓参を叶えさせてもらった。今度

クエゼリン大里清氏夫妻からの書簡

このたび私たちが日本にまいりました時には大変お世話様になりました。又ふたたびあんな事が出来まして本当にうれしく思っています。たくさんのおみやげいただき又おいそがしい所を羽田までお見送り下さいまして本当に

ありがとうございます。あのオートフのごちそうがともにおいしかったです。あんなにオートフで色々リヨリが出来ますとは思いませんでした。主人は一年前から体のちよしがよくなかったのですが、今度はガマンしておりました。薬はもって行きました。がたりなかつたのでホノルルにつきま

す二時間前からサムクなり何も食べずにねていました。ホノルルのドクターのおっしゃるのに体にウミノハナがた

の貴い経験からもっと多くの会員を現地に遣りたいと痛切に感じている。そして私共が受けた好意と感激を、更により多くの遺族の方々に頌ちあいたいと、そう願っています。
尚、今回の墓参を可能ならしめた、浮田会長のなみなみならぬ、積年のお努力を本稿を籍りて改めてお礼を申し上げたい。

なりませんが私が出来ないのです。ま

せんが浮田様からよくおつたえ下さいおねがいします。オフルンキおかりした奥様にもよろしくおつたへ下さいませ。おなまえわすれました。ではお元気で。
51年6月14日受

3月26日クエゼリンの大里様から、カレンダーと共に丁寧な手紙が届いた。昨夏御来島の際は時間もなくて、何のおあいそもできず申訳けなかつたの御挨拶と「私達は十年ぶりに日本に行くことになりました。4月11日か13日になります。出来れば皆様にお会いしたと思います。ケイオーブラザホテルです」との事でした。

チェンバレン様が郷里オレゴン州にお引揚の時、あとは大里様夫妻にお願いしてあると云い残されたので、この

来日は本会にとり、今後のクエゼリンとの連絡上好機会であった。

16日朝大里さんから電話があり14日（ハワイ時間では13日）予定通り羽田に着いたがヒルトン・ホテルに変更になったため連絡おくれたとのこと、早速同ホテルに夫妻を訪問した。昼食は鶯谷笹の雪豆腐料理に御案内し、食後は御希望の国際劇場「桜まつり」観劇に御招待した。この間のお話で今回は郷里八代市の御両親の墓参が主目的であること、クエゼリンにはあと数年のこのこと、明日東京発、墓参後26日帰京、29日羽田発、ハワイ経由、帰任の旨知らされた。

このため27日原宿水交会で夕食会を催し、本会との懇談を行うことにしました。当夜大里夫人は熊本旅行のお疲れのため欠席。大里さんと甥大里秀敏さん（滞在中終始案内役を勤められた）本会からは会長、副会長、役員18人、楽しい和やかな懇談がつづいた。昨夏クエゼリンでお世話になったものが多く従来より更に身近に感じる一夕であった。29日夜羽田には本会から、八名お見送りました。

↓ ↓ ↓ ↓ ↓

↓ ↓ ↓ ↓ ↓

墓 参 感 謝

国 松 ふみ江

現地墓参の計画が決まり、いよいよ渡航手続も始まろうという或日、私は階段を踏みはずし、右手首の骨折、一時は、渡航も断念しなければならぬか、危ぶまれましたが、手を吊りながらも参加できることになりました。思えば38年6月29日クエゼリン方面戦死者遺族会が発足後今日まで、浮田現会長の十年余に亘る弛みない努力が実を結んで、今回ハワイ経由で8月15日、永い間念願の墓参が叶い、本当に恵まれた事でした。全員無事に帰れましたことは、多くの御英霊の御加護に寄ることは申すまでもございませぬが会長夫妻はじめ、御世話下さった多くの方々の御蔭と御礼の言葉もございませぬ。色々とむづかしい条件の中で、あの場所に建てて下さった御苦労が身に沁みて判りました。改めて厚く厚く御礼申し上げます。

この島の土の上で主人は戦死しました。涙が雨のようにこぼれ落ちるのでした。碑に近よったとき、英霊もどんなにか、この日の来るのを、待ちわびていたことでしょう。土の下で感謝して下さったと思います。在りし日の面会時間と同じであります。と私は心の中で思っておりました。胸がばいになり涙がとまりませぬ。本当に来てよかった。定められた時間故に、心をあとに残して帰って来ましたが、この心に刻みこまれた気持は一生忘れられないことではできないでしょう。現地でお世話下さる方々の真心の御奉仕と、米軍当局の温い御援助のお蔭であると深く感謝すると共に、今後も永久に維持されることを切望する次第です。

もう一つの大きな収穫は和やかな一週間の皆様のとて身近に感じた体験で、かつてない人の和をつくづく感じました。

青き波 白き砂土 踏みしめて
君の笑顔が 胸にせまる

花束を 捧げて祈る 夏の海
念願叶ない 現地墓詣り

チエンバレン夫人
からの書簡

御丁寧な御悔み状頂きまして厚く御礼申し上げます。

お知らせ申し上げなくてはと、日々心にかげながら、余り突然のことと心身共にショックが大きくて、しばらくは後を追うのかしらと思ふ程でございました。そして多少心の平静を取戻したからは公私の種々の手続などに、追いまわされて思いもかけぬ月日がたつてしまいました。

2月10日土地、家屋、店舗を入手、マケットの仕事を始めて10日目、2月19日夜心臓痙攣の発作をおこし、30分後には、もう亡くなつてしまいました。

思いもかけぬ主人の急死で、私一人残され土地や家作、マケット等山の責任を負うことになり、只々無我夢中で今日まで過して参りました。米本土に戻って遺族会のアルバムをつくらうと贈ると申しておりましたのに、とうとう果さないで逝つてしまいました。さぞかし心を残してと、沢山のカメラや写真器具用品を整理しながら、泣かされております。

日々の営業に手一ぱいで、クエゼリンからの荷物もまだ三分の一も箱を空けておりません。その内多少の時間のゆとりが出来ました折に、せめても主人の遺作のクエゼリンの写真をお送り

申し上げますと、考えてはおりませんが、何時になります事やら、何卒御了承下さいませ。

大里様御夫妻の御訪日で、色々お話しなさいましたとの事、何よりとお喜び致しております。度々申し上げましたように、大里様のお力添えが一番大きいのでございます。遺族会のために私は心から喜び、安心致して居ります。

チエンバレンがこの上なく愛したオレゴン州の美しい海と河の眺めの良い丘の墓地に安眠いたしております。私に残してくれた広大な土地も店も、私にとつてもう何の意義も無く、機会のあり次第整理して、静かに主人の供養に今後をすこすつもりで居ります。

御遺族の皆様が一人でも多く墓参の願いの叶う日が、一日も早からん事を朝夕念じております。せめてもの私の現在出来る事で御致します。どうぞ今後共々くれぐれも御身お大切に。御遺族の皆様のお力になって差し上げて下さいませ。奥様にもどうぞくれぐれもよろしくお伝え下さいますようお願い申し上げます。

本当に色々とお心づかい頂きまして有難うございました。先ずは御礼と共にお知らせのみ。

五月十一日

チエンバレン和子

(51年5月17日受領)

本年二月六日の行事報告

事務 局

二月五日干天58日目の早朝から降

雨。午後小雪。夜雪やみ曇。六日午前曇午後雨。七日快晴。

一、前夜祭(昨年に続き二回目)

場所・昨年と同じ九段会館地階(有明の間)。時間・午後7時から。昨夏本会現地墓参団の行動を報告するため夕食の時間を省きました。予報のとおり、行動中団員のとったスライド、8ミリの映写や録音テープ、アルバムを中心に逐一説明。満員の盛況。

二、九段会館宿泊者

5日38名。6日1名。7日6名。延員数45名。

三、慰霊祭

例年通り受付9時を待てず到着する方もあり、8時から受付開始。参会者、来賓7名、会員180名。計187名。

定刻10時拜殿に昇り、修祓をうけ、神官の先導に従い御本殿に昇殿しての慰霊祭は11時滞りなく終了。英霊に来年の対面を御約束して、下降の途、例年のように神饗、神饌、神酒を戴き御本殿にお訣れした。することはすませたという感に打たれた。

四、定期総会

昨年通り靖国神社参集所で行った。秋山幹事が議長に選ばれ議事が進めら

れた。

例年通り前年度の事業報告と決算報告、つづいて昭和51年の事業計画とこれに伴う予算案を説明し全会一致で原案通り可決された。

次に昨夏現地墓参に参加し、現地事情を修得した新進気鋭の会員、常時本部との連絡容易の四名を新しく幹事に指名する件を発表のところで全員拍手を以て賛成、今後会務の充実発展に寄与されるよう願うこととなった。これ为本会役員は会長副会長の外常任幹事2名、幹事16名、監事2名、計22名が会務に当ることとなった。

諸物価特に公共料金の暴騰に伴う会費値上げの動議もあったが、あと半年我慢することとし定期総会を終り、つづいて希望者91名による直会旅行にうつった。

直会旅行については井上常任幹事の「直会旅行に参加して」で御承知願いたい。

なお本年も直会旅行参加者一同の持ち寄り費用の残金一、四七〇円が寄附金として本会に寄贈されたことを附記し御礼申し上げます。

(新幹事御氏名は事務局だよりに掲載しました)

二月六、七日直会旅行に参加して

常任幹事 井上 賀 雄

今迄、仕事の関係で都合がつかず、靖国神社での慰霊祭、定期総会が終ったあと、いつも私は、旅行に出席するバスをお見送りしておりましたが、今度は、91名の皆様とご一緒に、初めて直会旅行に参加させて頂きました。既にご案内の通り、今年には伊豆下田温泉に、バス二台を連ねて出発。

(先づ、お世話をして下さった幹事さんに、この場を借りて感謝の意を表したいと思えます。旅行計画の安全確認の為、ホテルや観光ルートの現地調査を事前実施された上で、〃環礁〃に御案内として掲載されたわけです。当日のご苦労も然ること乍ら、私達の見えないこと等、大変だろうと、唯々頭が下がります)

白く薄化粧した丹沢の山並を右の車窓に眺め乍ら、バスは順調に高速道路を一路伊豆下田温泉に向います。立春を過ぎたとは言え、未だ雪の降る季節。途中、俄か雨がみぞれ模様になりましたが、大したこともなく無事、下田グランドホテルに到着致しました。

今朝、靖国神社に夜行列車で馳せ参じられた方もおられるとか、先づは、温泉につかって、ホッと旅の疲れを癒やされたことと思います。やがて、宴

会開始。大広間に豪華に調えた鯛の活き造りが並ぶ各テーブルに、数人づつに分れて席につき、最初に浮田会長のお話。続いて、特別参加の方々のお話。特に木下甫様のインドネシア独立当時のお話は、印象深く伺いました。「当時の日本は諸外国の植民地政策に對抗して、自衛の為、アジア民族の独立の為、身を挺して戦った。今日では、ご承知の通り、アジア、アフリカに於いて、数多くの独立が達成され、又、されつつありますが、その戦争の犠牲となられた皆様の肉親のことを思うとき、生き残った吾々は、どんなことでもして、ご遺族皆様の為にお役に立たせて頂きたい気持ち一杯です」と何んとも有難く、貴重なお話を一同拝聴致しました。

その後、待ってましたとばかり余興に移り、参加者のお国自慢の歌など、仲々どうして大したもの。皆様の芸達者振りには驚きました。この直会旅行を毎年楽しみにしておられる方が多いと聞いておりましたが、この賑やかさ、楽しさならさぞかしと拝察致しました。盃を酌み交わし乍ら、お互の話に花を咲かせ、和気藹々のうちに一時を過しました。続いて隣の部屋に用意

第 12 期 決 算 報 告 書

(自昭和50年1月1日 至昭和50年12月31日)

マーシャル方面遺族会

一般会計第13期

(昭和51年度)予算

一般会計 収入の部

科 目	金額(円)
前期より繰越金 会費収入	1,009,297
(50年度分)	608,100
(51年度以降分)	351,000
寄附金等	1,259,367
受取利息	116,882
預り金(旅行費等)	461,000
雑収入	30,914
計	3,836,560

一般会計 資産内訳

摘 要	金額(円)
現金	26,316
預金	
普通預金	29,082
富士/祐天寺	979,254
都民/学芸大駅前	94,424
振替貯金	
計	1,129,076
預り金	461,000
前受会費	332,000
51年分	58,000
52年分	17,000
53年～	
計	868,000
差引正味資産	261,076

収入の部

科 目	金額(円)
昭和50年度よりの繰 越金	261,076
会費収入	1,000,000
寄附金等	1,700,000
受取利息	100,000
雑収入	30,000
合 計	3,091,076

一般会計 支出の部

科 目	金額(円)
慰 霊 費	72,800
運 営 費	1,318,084
刊 行 費	390,590
印 刷 費	5,340
通 信 費	40,303
事務所借用費	191,843
振替払込料	31,680
事務用品費	56,215
会議費	11,750
雑費	7,100
特別会計へ繰入	264,979
預り金返済	316,800
次期へ繰越金	1,129,076
計	3,836,560

第12期特別会計収支計算書

1. 収入の部	
前期より繰越	1,500,000
特別寄附	254,350
一般会計より繰入	264,979
計	2,019,329
2. 支出の部	
現地慰霊祭経費	519,329
3. 次年度繰越	1,500,000
特別会計 資産内訳	
普通預金 都民/学芸大駅前	300,000
定額郵便貯金	1,200,000
計	1,500,000

支出の部

科 目	金額(円)
慰 霊 費	80,000
運 営 費	1,550,000
刊 行 費	550,000
印 刷 費	20,000
通 信 費	100,000
事務所借用費	220,000
振替払込料	50,000
事務用品費	60,000
会議費	80,000
雑費	20,000
予備費	50,000
職員退職金引当	50,000
次年度繰越金	261,076
合 計	3,091,076

註 1. 51年度予算の前年度よりの繰越金 261,076 円には旅行費預り金 461,000 円並びに会費前受分 (51年度以降分) 407,000 円、計 868,000 円が含まれておりません。

註 2. 会費は大体約 1,000 名の方々から納入されています。

以上監事の監査を経て報告いたします。

昭和51年2月6日

した、昨年のマーシャル諸島墓参の時の一行の8ミリやスライドの映写は、
 当時がまざまざと想い出され、何度観てもいいものだと思いました。その
 夜、一部の男性は幹事部屋に集って、
 軍歌を英霊にも聞こえよとばかり大声
 で、次から次へと感心する程歌いまし
 た。翌日は、天気にも恵まれ、バスガ
 イドさんの案内により、唐人お吉ゆか
 りの了仙寺、洋蘭センター等を見物。
 堂ガ島で昼食、バスの中でも、素人は
 なれのすばらしい歌などを聞かせて頂
 き乍ら、帰途につきました。最終、九
 段会館の地下食堂に役員たちが、落着
 いたときは、ほつとした中にも、後味
 の良い爽やかな楽しい気持ちでした。同
 じ遺族であるという共通点が、お互の
 垣根をはづし、お互に慈しみ、労り合
 う気持ちにさせているものと思います。
 初めて参加した私は、直会旅行の意義
 を十分に味わうことが出来ました。誠に
 有難うございました。

入会の喜び

広島県 大上 八重子

一面識もない者が手紙を差し上げ申訳がありません。お宅がマーションル方面遺族会のお世話をされている事を厚生省から承り、この手紙を書きました。私の夫は同封の海図中、赤線で囲んだところを潜水艦で潜航、ウォッセ方面に向け航行、昭和19年3月24日戦死したとのことです。それで、

①年内にこの方面に行かれますか

②予定月日お知らせ下さいませんか

③今年三十三回忌なので是非行きたいのです。

51・2・7受

第二信

本日は御親切なお手紙ありがとうございました。開封、拝見致しまして、喜びと、涙でどうすることもできませんでした。何故かその夜はねむられず色々と思い出され、又十年前会長様が御苦労なされたこと想像しまして夜が明けてしまいました。遺族会から機関誌を出しておいでの由。是非送って下さい。

次に、

①本会々員になる手続を教えてください。

②環礁第一集、第二集及21号―24号迄在庫がごありの由送って下さい。

③今年戦死場所方面に行かれなければ又来年それで出来ねば又その次の年と、元氣よく暮していますので、其日を楽しみにしています。その節はよろしく願います。

第三信

先日(3月2日)の印刷物有難うございました。夕方帰りまして早速読ませて戴きました。時のたつのも忘れ12時近くまで読ませてもらいました。会長様はじめ役員の皆様方の御苦労大変でありました事解りました。どんなに御礼の言葉申し上げて良いやら只々感謝のみでございます。送って下さった印刷物で私自身現地にお参りしたような気がしました。無事三十三回忌もすませました。追伸 環礁第17号による戦史叢書②③の二冊お手配お願いします。

寄付者芳名

(四七三名)

今期もまた左に掲げますとおり、多数有志の方から御寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。会員からお喜びのお便りをいただいたり、寄付の御送付によって経済的御協力をいただく御心境を察し役員一同張り合を感じ努力いたしております。
(昭和50年11月1日から昭和51年5月31日までに入金の分)

寄付額 芳名(敬称略)

篤志会員その他

二〇〇〇〇

三〇〇〇〇

五〇〇〇〇

一〇〇〇〇〇

五〇〇〇〇

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

クエゼリン島

大里 清 殿

ハワイパレンジ

ヤイ殿

匿名殿

保科 欣也 殿

松岡 実 殿

嘉村 栄 殿

鈴木 寅雄 殿

高田源次郎 殿

藤平 直忠 殿

矢崎 寧之 殿

ナウル第四高会殿

井上 義雄 殿

十二 徳次 殿

匿名殿

木下 甫 殿

小林 重雄 殿

高野 庄平 殿

長谷川 博 殿

珊瑚 会 殿

福田 吳子 殿

松平 永芳 殿

直会旅行者一同

宮前ハツエ

妻 白山光枝子

妻 野沢きくえ

母 細川 きく

一〇〇〇〇

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

妹 岩川あい子

父 北村弥三郎

兄 黒沢 克己

兄 本間 藤吉

兄 坂野 猶蔵

父 三関 武治

妻 工藤 ハナ

母 高山 かや

妻 塚原 ハナ

姉 伝福 ちゑ

母 須藤 タケ

妻 田口 ロク

母 本堂 テフ

母 音喜多ミチヨ

妻 中山 リヨ

妻 星川 クマ

母 小杉 リサ

妻 平形せいこ

兄 卯花要一郎

兄 杉浦 広雄

妻 松本 孝子

妻 渡辺 雪子

母 熊谷サタヨ

姉 佐藤 敏子

妻 奥山 キノ

父 小室舜司郎

父 佐々木三郎

〃

一〇〇〇〇

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

兄 関山富一郎

妻 石井 正

妻 小野田正一

妻 大場美津子

母 渡辺 ミノ

妻 青野はつよ

妻 赤塚 美正

妻 大泉 時子

妻 丹野 アサ

妻 関根 チヨ

妻 富田 ミツ

父 緑川 智一

妻 石橋 節子

妻 坂本 吾郎

父 長谷川 潔

妻 吉津みどり

母 宮本 スエ

兄 若狭 明光

兄 堀江 誠一

父 青柳 泰蔵

兄 今橋 潔

父 遠峰 軍治

母 松塚 みよ

母 宮内 はつ

母 植木 モト

父 増淵利三郎

妻 永井 清

妻 猪瀬 ナカ

妻 菊地 サク

弟 田中 彦豆

母 菊山 モト

妻 菊地 サク

母 田中 彦豆

妻 玉田 タケ

母 大橋 サク

妻 沢村 キヨ

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

